

ホームセンターを丸ごと買いたい

# グワイの時代が到来します

伊藤礼さんの最新刊『耕せど耕せど 久我山農場物語』では、家庭菜園と人との関係、野菜作りの奥深さがユーモラスに綴られている。内容は同じでも、家庭菜園とは程遠かった戦中戦後の食料生産をはじめ、伊藤さんの野菜作りの「原点」を聞いてみた。

エッセイスト・翻訳家

## 伊藤 礼

●いとう・れい 1933年東京生まれ。著書に『こぐこぐ自転車』『自転車ぎこぎこ』（ともに平凡社）『大東京ぐるぐる自転車』（小社刊）などがある。

### みんな空腹だった

——新著『耕せど耕せど』でも書かれています。戦中から戦後にかけて、食料確保のために畑を作っていたそうですね。

戦中は東京の世田谷区、戦後は日野町に住んでいて、私と父（小説家の伊藤整）で、イモやムギなどの主

食を専門に作っていました。収穫したイモを入れた箱の数を数えて安心する——そんな感じで。当時は配給だけでは食べてゆけませんでした。

——小沢昭一さん（昭和四年生まれ）によると、東京の食料事情が急激に悪くなったのは、昭和十五年くらいからだそうです。

父のこの写真（次ページ）は、昭和十六年に撮影されたものです。ト

ウモロコシの背丈からすると、五月か六月くらいに撮られたのだと思いますが、戦争が始まるのが同じ年の十二月ですから、開戦直前、まだ杉並の和田本町にいた時代です。このころから、父もいよいよ食べ物の心配をし始めたのでしょうか。杉並とさき畑を始めたのは、近所では私の家が最後でした。うちの前に広がっていた野原には、ご近所だけでなく、

少し離れたところからも人がやってきて、早稲勝ちで紐で囲って自分の畑にしていました。

私は昭和八年生まれですが、三、

四年上の世代とはずいぶん違います。上の世代は、普通の時代を知っていました。おやつにしても、板チョコ一枚食べられました。私には、母が

板チョコをポキンと割ったものを、少しずつしかくれませんでした。森永のミルクキャラメルも、一粒か二粒。一箱丸ごと自分のものにといいこともあり得るとは思いもありませんでした。



鎌を手にする伊藤整。写真の裏には「昭和十六年 東京杉並区和田の自宅前にて」とある。開戦の年、逼迫する食料事情の中で、家族を養うため、作家みずから野菜づくりに着手した。写真のあたりは現在、立正佼成会の大建築物が建つ

それから小学校六年生のときには、学童集団疎開を経験しました。学童疎開は、米軍の空襲が差し迫り、政府が子供を疎開させなければならんということ、発案されてから実施されるまでに二、三か月で緊急に行なわれた事業です。強制ではなかったのですが、家によっては親戚のところへ縁故疎開する子供もいました。——戦争末期の、ある世代だけが経験した特殊な体験ですね。

私の疎開は昭和十九年の七